

## 「授業改善リーダーのためのアクティブラーナーズサミット2016」が開催される

東京大学 大学総合教育研究センター（中原淳研究室）と一般財団法人 日本教育研究イノベーションセンター<sup>（注1）</sup>は、2015年度から「高等学校における参加型学習に関する実態調査」<sup>（注2）</sup>（以下、全国調査）を実施。2015年12月に第一次報告書、2016年3月には第二次報告書をまとめ、「未来を育てるマナビラボひとはもともとアクティブ・ラーナー！」（<http://manabilab.jp/>）にて公開している。

3月26日には教育委員会・教育センターの指導主事等を対象とした「授業改善リーダーのためのアクティブラーナーズサミット2016」（以下、サミット）を開催。授業改善のための4つのテーマ別ワークショップを実施し、高校でのアクティブラーニング型授業の高度化を支援するための研修方法を提案した。今回はサミットの様子についてレポートする。

### 参加型授業の実施率は全国で75.5% 校内研修実施率は群馬県がトップ

サミットは教育委員会の指導主事、教育センターの研修担当者を対象に東京大学本郷キャンパスで実施された。教育委員会の指導主事等を対象としてサミットを開催したのは、高校でのアクティブラーニング（以下、AL）の高度化を支援するためには、授業改善のための研修が必要となるため、それらを担う人材への働きかけが重要と考えたからだ。

冒頭、本プロジェクトのリーダーである中原淳准教授は、その趣旨を以下のように、語っている。

「現場のことは現場の先生が一番理解している。現場の先生が動き始めなければ、何も進まない。しかし一方で、ALにどのように取り組めばいいのか、現場の先生方が浮き足立っているとも聞く。我々のプロジェクトのコンセプトは『地に足を着ける』。現場の先生方を元気にする立場である指導主事の先生方に対して、さまざまな実態を表す数字や、すでに現場に溢れている実践事例などを提供することで、上から押し付けるのではなく、現場の先生方に丸投げするのでもない、違った角度で現場の先生方を支援するお手伝いをしていきたい」

オープニングでは、「サーベイ・ダイアログ」として、全国調査の結果と、「マナビラボ」の概要が紹介された。

全国調査については、「教科として参加型学習に取り組んでいる教科がある」と回答した高校が全国で75.5%にのぼり、すでに多くの高校で取り組みがなされていることが報告された。また、取り組みの状況を見ると都道府県

ごとに差があり、群馬県では「参加型学習の内容を含む校内研修を行っている」が77.1%<図表1>、「参加型学習の実施について、校内の会議などで積極的な呼びかけを行っている」が66.7%、「学校全体として参加型学習に関する目標を掲げている」と「参加型学習の推進に関する具体的な計画を策定している」が62.5%と、いずれも全国で最も高い割合となった。（32ページ参照）

さらに、ALの視点に立った参加型授業（以下、AL型授業）を実施している高校の特徴として、「学校全体として目標を掲げている」「具体的な計画を策定している」「参加型授業の内容を含む校内研修を実施している」「カリキュラム・マネジメントができている」の4つが共通する要素であることが報告された。

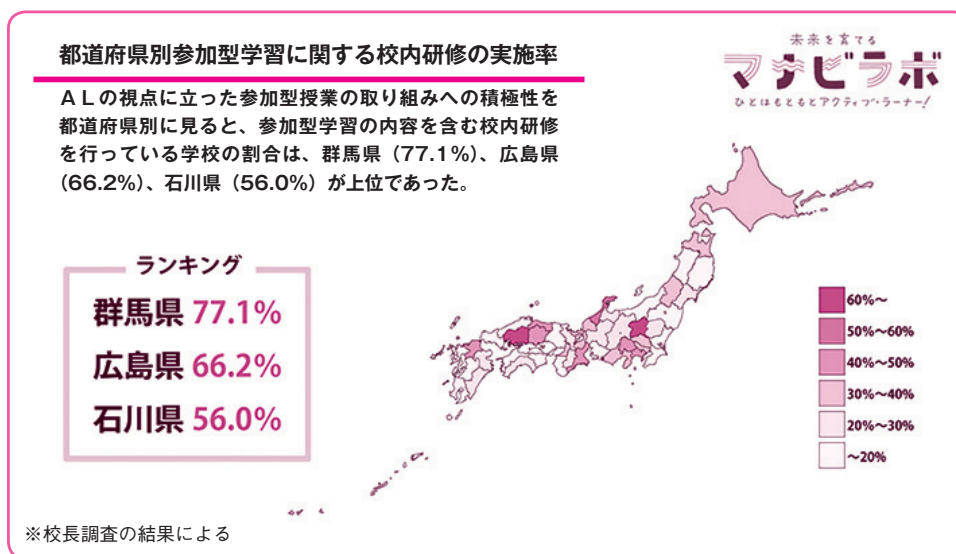
AL型授業の効果として感じているものは、学校代表者と教科主任ともに「生徒・教員間のコミュニケーションの深化」「主張・傾聴・討論などのコミュニケーション力」「自分の考えを言語で表現する力」「他者と一緒に学ぶ楽しさ」「自分の考えを深める力」が上位に挙がった。また、AL型授業の効果を感じている学校に共通する特徴として、「ねらいを意識し、理解深化型、探究活動型、意見発表・交換型などの学習活動や、授業方法の工夫などに取り組んでいる」「関係者の理解を獲得することで悩みを克服している」などが見られる。一方で、生徒の学習態度に関する悩みを抱えている高校では、効果を感じられていないことも報告された。

AL型授業に関する悩み（困難や課題、不安）については、学校代表者・教科主任ともに「授業前後の教員の負担が増加する」が最も多い。しかし、学校代表者が「必

（注1）一般財団法人 日本教育研究イノベーションセンター（JCERI）…学びの支援を目的に、河合塾グループが2014年2月に設立した一般財団法人。教育理論、教育方法等の研究・開発とその実践活動も支援・推進。今回の共同プロジェクトの他に高校教員へのアクティブラーニング研修・研修会への講師派遣、研究成果の出版事業等も行っている。

（注2）調査は2015年7月～9月に普通科、それに準ずる学科、総合学科を設置する全国の3,893校を対象に郵送法により行われ、62%に当たる2,414校から回答を得た。校長等の学校代表者、教科主任（外国語、数学、国語、理科、地歴・公民）、AL型授業を実践している先生の3種類の調査からなる。

<図表1>都道府県別の状況<sup>(注3)</sup>



要な施設・設備が足りない」「予算が足りない」などに悩みを感じているのに対して、教科主任は「授業の進捗が遅くなる」「生徒の学習活動を客観的に評価することが難しい」が挙がるなど、職階による違いも見られた。これらの悩みに関して調査からは、「教員の理解に関する悩みは、カリキュラム・マネジメントがうまくいっている高校ほど少ない」「生徒の学習態度に関する悩みは、意見発表・交換型、探究活動型、理解深化型などの学習活動に力を入れている高校や、校外のリソースを活用したり校内研修や同僚との学習の機会を設けたりするなどの工夫をしている高校ほど小さい」「教員の負担増加に関する克服方法はリソースの整備」などの分析結果が得られている。

### 教科により参加型授業の取り組み内容が異なる

さらに、講演に関連して配布された「ニッポンのマナビ 今の高校の授業とは? スペシャルレポート」では、上記の内容に加え、教科(国語科、地歴・公民科、数学科、理科、外国語科)によるAL型授業のねらいや活動の違いについて報告された。

AL型授業のねらい(AL型授業を通して身につけてほしい力)は、「社会の一員としての市民性意識」が地歴・公民科で重視されるなど教科特性も見られたが、教科にかかわらず、「自分の考えを言語で表現する力」「主張・傾聴・討論などのコミュニケーション力」「各教科で身につけた知識・技能を活用する力」が重視されていた。

AL型授業で取り組んだ学習活動についても、理科で「実験室などでの実験や観察」「自然体験・社会体験活動」「データの整理・分析やレポートなどのまとめ活動」に取り組む割合が高い一方、「教員による思考の活性化を促す

説明や解説」「生徒による発表(プレゼンテーション)」「生徒同士で意見を出し合う活動(ブレインストーミング)」などは教科を問わず多かった。

学習環境や授業方法の工夫については、「生徒が自然体験・社会体験できる場の活用」は理科で、「複数の教員による合同の授業の実施」は外国語科で多く取り入れられていた。「アナログな教材教具の工夫」「学習の到達点を意識させる工夫」「生徒の学習を促す動機づけの工夫」などが教科を問わず多かった。

AL型学習での活動や成果物を評価し、成績に含めているか聞いたところ、各教科とも65%~70%が成績に含めていると回答したが、数学科では38.7%と非常に低かった。評価の対象も教科による傾向が見られ、数学科以外では「作文やレポートなどの提出物」(77.4%~80.9%)が最も多く利用されていたが、数学科では「生徒の授業への参加度・積極性」(60.7%)が多く利用されていた。生徒による発表を評価対象としていたのは、外国語科の74.3%に対して、数学科は34.9%であった。

AL型授業の効果や悩みについては、教科による差はあまりなかった。

### 授業改善のための研修 4タイプのワークショップの提案

今回の全国調査により、すでに多くの高校でAL型授業への取り組みがなされていることがわかったが、今後、AL型授業が高校の現場でさらに拡大し、一般的な授業方法として定着するに当たって、内容や教授法のさらなる高度化が求められることが予想される。それを担うのは個々の教員であるが、そのためには校内研修や校外研修などによる授業

(注3) 出典：木村充，山辺恵理子，中原淳(2015). 東京大学-日本教育研究イノベーションセンター共同調査研究 高等学校におけるアクティブラーニングの視点に立った参加型授業に関する実態調査：第一次報告書 <http://manabilab.jp/wp/wp-content/uploads/2015/12/1streport.pdf>

＜図表2＞『授業改善リーダーのためのアクティブラーナーズ  
サミット2016』プログラム(抜粋)

オープニング	サーベイ・ダイアログ ①全国調査の結果報告 ②「マナビラボ」について
テーマ別 ワークショップ	WS①『グループ・ファシリテーション』 WS②『教科でのキャリア教育』 WS③『教員連携で進める授業改善』 WS④『指導主事の育成研修』
全体 ディスカッション	ジグソーセッション 基調講演：京都大学 溝上慎一教授 ラップアップ：東京大学 中原淳准教授

改善が必要となる。今回のサミットでは、個々の教員に対する研修を担う教育委員会の指導主事などに対して4タイプのワークショップを実施し、研修方法の提案を行った＜図表2＞。

ワークショップ①「グループ・ファシリテーション」は、AL型授業を行う際に教師が担うことが求められる「ファシリテーター」の役割に焦点を当て、グループ・ディスカッションやグループ・ワークを通じて、学びを引き出すファシリテーションに必要なスキルや姿勢について学ぶ内容である。ワークショップでは、ファシリテーションにおけるリフレクション（省察、内省、振り返り）の重要性を説明した上で、リフレクションのポイントとして、「讃える」「その時の気持ちを聞く」「今後の抱負を聞く」ことなどの重要性を挙げた。

ワークショップ②「教科でのキャリア教育」は、教科の学びの中でAL型授業を通して、汎用的能力の育成を可能にするためのカリキュラム・マネジメントについて考えることを目的としている。前半の講義では、「育成すべき生徒像の策定」から「教育目標（育成すべき知識・技能、能力、資質）の設定」を行い、そこから「カリキュラムの作成」を行い、そのための「シラバスの作成（科目のデザイン）」「授業案の作成」に進むカリキュラム設計の手順を示した。その上で、ワークショップでは、架空の高校の学校目標やシラバスなどを題材として、カリキュラム・マネジメントを意識したシラバス作りがなされているか等をグループで検討した。

ワークショップ③「教員連携で進める授業改善」では、組織的に教員連携を深め、授業改善を図るための「授業者を元気にさせる振り返り会」の運営方法を提案した。振り返り会の進行手順は次の通りである。

1. 授業者の感想（授業者が授業でめざしていたこと、良くできていたと思う点、不足だと感じる点、ヒントやアイデアを得たい点を発言）
2. ほめる（メンバー全員から良かった点、自分もやってみようと思った点等について発言）
3. 質問する（建設的な質問、授業者にとって利益になるような質問をする）
4. 授業者へのラブレターを書く（意見やアドバイス、情報提供など何を書いても良いが、授業者に愛と勇気を伝える精神で書く）
5. 最後に一言（気づいたこと、感想等）

この一連の活動を行うことで、参加者が実践のヒントを得て、継続的に学習・成長できるような振り返り会を構築することを提案している。

ワークショップ④「指導主事の育成研修」では、指導主事

が授業改善リーダーになることを提案している。指導主事が各校でAL型授業の指導をすることで、「指導者不足の解消」「講師料等の経費削減」「都道府県市で共通した指導ができる（転勤しても教員が混乱しない）」「現場は何度でも指導者を呼べる」「教育委員会と現場の信頼を高める」「指導主事が管理職として学校に戻った際に、組織的な授業改善ができる」などの効果があるとしている。そして、コンセンサスゲームという方法を用いたAL型授業を体験し、課題に対して個人で出した結論とグループで出した結論を採点するとグループの結論の点数が高くなることを確認。これにより協働的な学びの効果を実感することができるワークショップを行った。

### アクティブラーニングが求められる背景には トランジション（移行）の課題がある

最後に基調講演として、京都大学の溝上慎一教授が「トランジション課題を解決するためのアクティブラーニング改革」と題した講演を行った。溝上教授は、初等中等教育にALを導入することが求められる背景には、学校から仕事・社会へのトランジション（移行）の課題があるとしている。

社会が急速に変化する中で、大学や高校には、知識だけでなく、「汎用的技能」「態度・志向性」「統合的な学習経験と創造的思考力」といった、社会で通用する能力や態度を身につけさせて、生徒・学生を卒業させることが、これまで以上に求められるようになった。そして、そうした力を育てるために、まず高等教育にALが求められるようになり、さらに初等中等教育にも求められるようになったことを解説した。その上で、小学校から大学までの学びをALでつないで若者を育てていく「トランジションリレー」が必要であると指摘した。

全国調査報告、ワークショップ、講演など豊富な内容で構成された今回のサミットは、盛況のうちに約5時間にわたるプログラムを終えた。

# 「校内研修コーディネーター」の配置などにより 多くの高校で授業改善が進む

群馬県教育委員会

## 全ての県立高校を対象に 「群馬県高校生ステップアップ サポート事業」に取り組む

「高等学校における参加型学習に関する実態調査」において「参加型学習の内容を含む校内研修を行っている」「参加型学習の推進に関する具体的な計画を策定している」「学校全体として参加型学習に関する目標を掲げている」などの実施率が高かった群馬県。その背景には、全県的に「群馬県高校生ステップアップサポート事業」に取り組んでいることや、校内研修コーディネーターが各高校でリーダーシップを発揮して

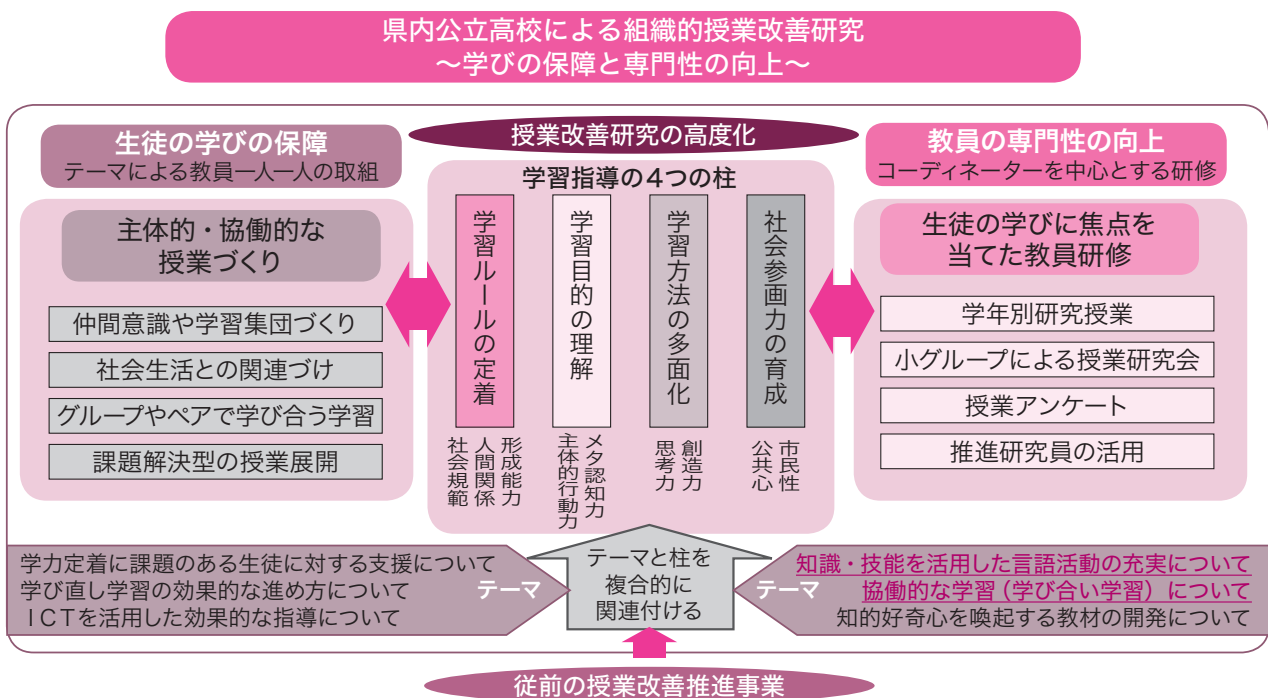
いることがある。取り組みの詳細について、それぞれ見ていこう。

「群馬県高校生ステップアップサポート事業」<図1>は、群馬県教育委員会が2015年度から、全ての県立高校を対象として取り組んでいる事業である。「生徒が主体的・協働的に取り組める課題解決型の授業展開」と「組織的な校内研修を通じた教員の専門性の向上」を2本柱としており、「学習ルールの定着」「学習目的の理解」「学習方法の多面化」「社会参画力の育成」などを念頭に置いた授業改善を推進するとともに、学力の3要素の育成を狙っている<図2>。

「以前から各校で授業改善に向けた校内研修は行われていましたが、その多くが教科単位でした。本事業では、できるだけ学年単位、学校全体で実施するように促しています。特にALの場合は、教科の枠を超えて幅広い視点から検討することが有効だからです。実際、校内研修で他教科の取り組みを聞いて参考になったという声が数多く聞かれます」(群馬県教育委員会高校教育課教科指導係・天野正明係長)

「校内研修を行うときには、教員ではなく、生徒の姿を見てほしいと伝えています。特に他教科の授業の場合は、教え方よりも、生徒の学び

<図1>群馬県高校生ステップアップサポート事業《体制図》



(<図1><図2>とも群馬県教育委員会提供)

方に注目することで、参考にできる部分も見出せると考えています」(澤田太郎指導主事)

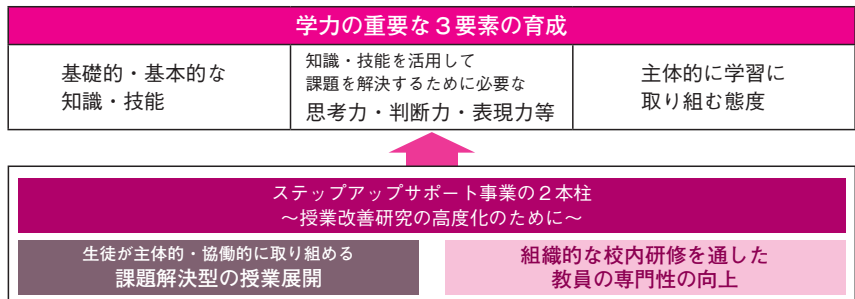
### 校内研修を充実させるために全校に「校内研修コーディネーター」を配置

校内研修を充実させるために、全ての県立高校に配置されているのが「校内研修コーディネーター」である。それぞれの高校のALに関する目標や計画を策定したり、年に2回以上の校内研修を企画するなど、各高校の授業改善のリーダーとしての役割を担っている。どのような教員を任命するかは、学校の裁量に委ねられており、ベテラン教員が担当することもあれば、ALの導入に意欲を持つ若手教員の場合もあるという。

「教育委員会の主催で、年2回(5月、1月)、校内研修コーディネーターを対象とした研修会を行っています。5月の研修会では、事務局から事業概要について説明し、外部講師によるALの必要性に関する講義を実施した後、『ファシリテーション』をテーマにワークショップを行いました。校内研修だけでなく、ALの授業においても、自分がファシリテーターとしての役割を果たすために何が重要になるのか、グループごとに活発な議論が展開されました。

1月の研修会は事例報告が中心です。昨年度は、授業改善、校内研修について、1名ずつ報告した後、研究協議を行いました。授業改善は、いわゆる進学校で積極的にALを導入して、授業に活気が生まれた事例です。校内研修は、草の根的に教員同士で仲間を作り、校内通信を作成

<図2>群馬県高校生ステップアップサポート事業の概要



して情報共有を図った事例が報告されました。他校の優れた取り組みがとても刺激になったと、参加者からも好評でした。研修会の内容を校内研修コーディネーターが持ち帰り、各高校の研修を充実させていきます」(澤田指導主事)

また、今年度から新たに、教育委員会と連携してALの在り方に関する研究を進める「ステップアップサポート推進研究員」も設置した。近隣の高校の教員に自らの授業を公開したり、教育委員会が主催する「授業研究会」でも、研究授業を担当したりする予定だ。各教科4～5名、地域のバランスなどにも配慮して、約60名の教員を教育委員会が指名している。

### 各高校が実態に合わせて授業改善の方向性を検討

2015年度から始まった取り組みだが、「指導主事による学校訪問などをすると、予想していた以上に各高校で授業研究が進んでいると感じます。校内研修コーディネーターの存在もありますが、それ以上に、多くの教員がALによって生徒の主体的な姿勢を引き出せると感じているからこそ、取り組みが広がっている

のだと思います」と、天野係長は手応えを語る。

一方で、いくつかの課題もある。

「生徒のアンケートを見ると、『以前より授業に積極的に取り組むようになった』など、好意的な感想が多いのですが、中にはグループでの学び合いにうまく入っていけない生徒もいるようです。そうした生徒に配慮しながら、どのように協働的な学びを取り入れていくかが、今後の課題だと感じています。ALを機能させるには、その前段階として、学習の場としての環境づくりも大切になるのです。また、ALを意図した授業だけでなく、それ以外の授業、あるいは学校生活すべてにおいて、生徒が主体的に活動できる環境を作っていくことも重要になると考えています」(澤田指導主事)

「今後も授業改善を進めていきたいと考えていますが、ALの導入に当たっては、グループ学習自体が目的になったり、机の配置を『コの字型』にするなどの学習形態のみに注目したりしないよう、各高校にはお願いしています。今後も、それぞれの高校、生徒の実態を踏まえた授業改善が進んでいくことを期待しています」(天野係長)